あの時も君はミルクティーを飲んでいた

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの時も君はミルクティーを飲んでいた

【Nコード】

N7599R

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

芝井探偵第9弾。忘れられない事件に思いを馳せる回想録。

プロローグ

サイドミラーを確認し、極端にスピードを落として右折する。ペーパードライバーではないのだが、レンタカーなので 学生なので当然車など所有していない 扱いに苦労していた。曲がりきって直進したところで再び話し続ける。

「そう。苗字に『藤』がつく人は平安貴族の代表格、藤原氏に起源を持つ人が多いんだ。伊藤、近藤、佐藤みたいな姓がそう。因みに伊藤は伊勢国の藤原氏、ということ伊藤、近藤は近江国の藤原氏、佐藤は、佐衛門尉という官職に就いている藤原氏だったかな。『源平藤橘』という言葉があるくらい格式高い姓だから、これらの姓を持つ人は歴史浅からぬ雅な姓を奉戴したと喜ぶべきだろう。但しこれらの姓を持つ人すべてが当てはまるわけじゃないし、名前の由来のみでほとんどの人が藤原氏と関係無いそうだけどね」

じゃあ、私の祖先も藤原氏になるのかな？

助手席に座っているショートカットの女性が問いかけてきた。円らな瞳は清清しさを宿している。

「いや、藤木の場合は藤原氏ではなく、先祖が暮らしていた土地に由来している可能性が高い。その理由は、先ほど挙げた苗字すべて『とう』あるいは『どう』と読むのに対し、藤木は『ふじ』と読む。藤木に限らず『ふじ』と発音する姓に関しては藤原氏との関連性は皆無と考えていいだろう」

なあんだ、残念。

藤木茜はがつくりと首をもたげてうなだれた。そこまで落胆するようなことか？

だけど、芝井君は博識だね。勉強だけじゃなく、こんな事まで知ってるんだから。

「これは単なる雑学、知ってようが知るまいが人生に影響を与える知識じゃない。こんなことで褒められては、むず痒くて仕方ない」

首筋をボリボリと搔く仕草を見せると、藤木は声を上げて笑った。そして、笑い声が途切れると藤木はドリンクホルダーに手を伸ばして、お気に入りメーカーのミルクティーをコクツと口に含ませた。喉仏がリズム良く上下したあと、ホツと一息つく。

「駅までで良いんだっただな？もう遅いから家まで送ってもいいけど」
駅前のロータリーに一旦停車し確認した。

ありがとう。でも、ここが良いの。買い物しなくちゃいけないし。今日も楽しかったあ、また誘ってね。じゃあ、来週も学校で。

ボタン、と勢いよくドアを閉め、窓越しから笑顔で手を振った後小走りで駅のホームへと向かい、ほんの数秒で見えなくなってしまう。

ふう、と深いため息をつく。今日も言い出せなかった、女性に對して奥手なのは自他ともに認めるところだが、ここまで免疫が無いとは自分でも呆れるやら情けないやら。どこかに行こう、と誘うのにも一苦労なのだから、次はいつになるのか判ったもんじゃない。次回は必ず言うんだ、『君の事が好きだ』と。

結果論になるが、あのときに言わなければいけなかった。屈託のない可愛らしい笑顔も仕草も、もう一生見ることが出来ない。もちろん、最初で最後であろうこの気持ち伝えることも。

「だいぶ暖かくなってきましたね」
その声と、カチャ、と陶器が当たる音でハツと我に返る。目の前にはコーヒーが置かれ、マスターが爽やかな笑顔で窓の外を眺めていた。

ここは『喫茶ふみ』。この店のコーヒーの味わいが好きで、常連になって久しい。度々新田と仕事の話をするのに使わせてもらっているし、マスターとも相性が良く、世間話や笑い話で楽しいときを過ごさせてもらっている。

「そうですね。風が吹くとまだ肌寒い感じがするのは否めませんが、今日も少し風があつたから、新田の奴は『寒い、寒い』なんて言いながら入ってくることでしょ？」

動揺を悟られないよう微笑みながら返事し、コーヒーを一口啜る。「今日は新田さんも来られるんですか？」

「ええ。捜査会議の後って言つてましたから来るにはまだ時間があります。事件がどうか、またやっかい事を抱え込んでいるんでしょう？」

今度は苦笑しながらコーヒーを飲む。

「お二人は本当に仲がよろしいんですね」
マスターは感心しているようすで首を上下させている。

「学生時代からの腐れ縁ですよ。しかし、今日に至るまで途切れず良好な関係を築けているわけですから、友人の少ない私としては感謝しています」

「私も友人は少ないですが、ところで『友人』とはどういう状態をさすのでしょうか？」

「どういう状態？」

真意を測りかねて問い返す。

「定義、と言つた方がいいでしょうか。相手との相互関係を示す言葉は色々あります、知人、友人、親友など。その境界線はどこにあるのでしょうか？」

「個人差があるので誰にも明確な答えを導き出すことは出来ないんじゃないでしょうか。少し話せば友人、と捉える人もいれば、ものすごく仲が良くても友人、と捉える人もいるでしょうし」

「芝井さんはどうお考えなのですか？」

「私は後者です。というか親友などという言葉は要らないとさえ思

つています。一度『友人』という言葉の意味を辞書で引いたことがあります。そこには『手と手を携えて触れ合う意味であり、志を同じくし親しい情愛を持つ者同士の関係である』と書いてありました。これをそのまま当て嵌めると、友人すなわち親友なのです。『友人』には『親しい情愛』を持って接しているわけですから。思うに、現在の『親友』という言葉の使われ方は、私はあなたを特別に優遇しています、と認識させて立場の安定を図りたい 独りぼっちになる不安を取り除きたい という自己防衛の手段に過ぎない、と考えています。まあ、理屈はともかく一番大切なことは、言葉の上っ面だけを捉えるのではなく、どういう姿勢で相手に接するか、ということに尽きると思います。」

マスターは真剣な顔つきでうんうんと頷き、話がひと段落すると俺の返答に満足したのか微笑がこぼれた。

「私も同じ意見です。芝井さんが先ほど新田さんのことを『友人』と称した意味が判りました。」

マスターはしてやったり、という顔で頬を緩ませた。

なるほど、マスターは俺の口からそれを言わせたかったわけだ。

新田のことを世間一般で言うところの『親友』と思っている、と。さつき腐れ縁、と評したことが本当かどうか試したのだろう。それと、もう少し素直になれよ、と言いたいのもしれない。

「これは一本取られました。マスターは人の気持ちを表に出させるよう話を持っていくことが本当にお上手だ。けれど、私は新田だけでなくマスターのことも『友人』だと思っていますよ。」

と言うと、マスターは照れたように頭を掻く。

「ありがとうございます。最近は涙腺が緩くなってきていますのでそこまで勘弁して下さい。」

今度はこちらがやり返してニヤリと笑う。それを見てマスターも微笑むと「ごゆっくりして行って下さい」と言って厨房に戻っていた。

壁に掛けてある時計を見る。予定の時間にはもう少しだが、会議

なんて遅れることを前提にしているようなものなので、まだゆっくり出来るのかも知れない。

コーヒーを啜りながら窓の外を眺めた。太陽はだいぶ傾いているが、依然やわらかな日差しを惜しげもなく放っている。

あの日もこんな心地よい天気で幸せな気分だったんだ。そう、あの日までは。

悲しい予感

レンタカーを返し、徒歩で自宅に向かう途中スーパーに寄り食料や生活用品を調達した。明日は特に予定は無し、以前買って手付かずだった小説でも読破するか。そんな若者らしからぬ退廃的なことを考えながら、両手に買い物袋をぶら下げ、まるで大所帯の主婦になったかのような足取りでよたよたと帰路についた。

家に戻って一息ついでにアイスコーヒーを飲んだ瞬間顔をしかめる。苦味だけを強調する雑な味。安物だから文句は言わないけど、今度喫茶店巡りでもして良い店探さないと。なんて事を考えながらテレビを見ていたら、携帯電話が鳴り出した。ディスプレイには『藤木』と表示されている。今日のお礼かな、そんなことはメールでも来週の学校の時でもいいのに。

「もしもし」
できるだけ明るい声で返事する。が、掛けてきた本人からの応答が無い。

「もしもし。おい藤木、聞こえるか？」

電波の調子が悪いと思い、大声で話しかけるも返事は返ってこない。やがてノイズのような聞こえた後プツリと通信が途絶えた。

何だよ、と呟き携帯を放り投げるように机に置いた。すぐに掛け直してくるかと思っただが、数分待っても音沙汰無し。単なるイタズラかとも考えたが、藤木はそんな児童で他人をからかう性分でもない。今度はこちらから掛けてみる。しかし受話器から聞こえてきたのは、電源が入っていない、との案内音声だった。

両手を後ろに回し、ストレッチをするかのようにのけ反り天井を見上げて頭の中で整理してみる。

明らかにおかしい、とは思っただけ。しかしそれが緊急性を要する違和感なのか、と言われると首を傾げてしまう。藤木の性格や日頃の態度と今の状況を照合したら『何かある』と思うのだがその何かが全

く見当もつかない。

最後に聞こえたノイズもさらに疑問を醸し出している。通信の不具合等で耳にする電子音的なものではなく、何か受話器に物が擦れたときに聞こえる、ザザツ、という音だった。それも何を意味しているのか判らないけど。

一通り思案した結果、藤木の家に行くことにした。何も問題無ければそのままトンボ帰りでもいい。

一度脱ぎ散らかした服やジーパンを素早く着て玄関を出ると、足早に駅の方へ歩き出した。夜になるとまだ寒い。口をすぼめて息を吐き出すと、まるで喫煙者が吐く煙のようだ。

藤木の家は二、三度何かの用事で行ったことがある。俺みたいなポロアパートではなく、立派なマンション　ワンルームという点は共通だが　で親元を離れて一人暮らし。たしか俺の家とは学校を挟んで同じような距離だったはず。最寄の駅を確認した後切符を買い、待つ時間と電車で揺られる時間を含めて十数分で目的駅にたどり着いた。文明の利器は凄まじいな、と変な所で感心する。しかし、その『文明の利器』が時には我々に害を及ぼすこともあるのだ、ということも知っている。私達は道具に使われてはいけないとどこかの誰かが言っていた。目的意識や確固たる意思を持って扱うことにより初めて『役に立つ』のである、と。

何か一つの題材が見つかると思え込んでしまう傾向にあるのはいつもの癖だが、それでも自然と目的は達してしまうのだから我ながら良い技術を体得したもんだ、とほくそ笑んだ。つまり、考え込んでいる間に藤木のマンションの前まで到着していたのだ。

藤木の部屋は508号、このマンションの最上階だ。築ウン十年の俺のアパートと違いさぞかし見晴らしがいいんだろうな、と冷やかした時には『景観なんて最初の一週間で飽きるわよ。それよりエレベーターが使えないときに感じる上がり下りの不便さの方が際立つわ。何と言っても学生なんだし、芝井君が思ってるより優雅な生活は送ってないよ』なんて言ってたっけ。しかし妬んでしまうのは

許してくれ。藤木は隣りの住人のイビキがうるさくて寝付けなかった、なんて経験は無いだろ？

エレベーターは使用せず階段で5階に向かう。普段からストイックな生活を強いられているので、これくらい何てことない。軽やかに一段飛ばしで5階まで達する。階段の真正面は503、となると508はここから右に5番目のドアになる。まあドア上にある表示を見れば一目瞭然だが。

508号の前に来てインターホンを鳴らす。ピンポンとドアの向こうから聞こえるが、しばらく待てども物音一つしない。

電話を掛けてきたのは自宅からじゃなかったのか？しかし、藤木が買い物で費やした時間と俺が取った行動で費やした時間を比較しても家に辿り着いてなければおかしい。まさかこんな時間から友達の家遊びに行くこともないだろうし。

もう一度インターホンを鳴らしてみるが結果は同じ。

杞憂だったのかもしれない。それならそれで問題は無い、と踵を返す前に何気なくドアノブに手を掛けたら、あっさりと半回転しドアが開いた。

杞憂、という言葉が一瞬にして粉碎した。これはかなりの高確率で良からぬ事が起きている。無意識に周りを見渡した。しかし人影などは無く、マンションの外は暗くて確認できない。

意を決してドアを全開にしてみた。部屋の中は真っ暗で何も見えない。ここで慌てて藤木が出てきてくれればどれだけ安堵できたことだろう。

「藤木、いないのか？」

闇に向かって投げかけても応答無し。耳をそばだてても目を凝らしても人の気配すらしない。

「入るぞ」

多分どうでもいいことだと自分でも半分承知しながらも、無断で人の家上がり込むことに抵抗があり、一声掛けてからドア横にあるであろう明かりのスイッチを手探りで探してオンにした。明かり

の点き始める時間がやけに長く感じた。

明かりが点いた瞬間目の前に映し出されたのは、綺麗好きで片付け上手だった藤木の家とは思えない程にあらゆる物が散乱した光景だった。しかし、こんな物的状況に興味は無い。物を踏まないようにつま先立ちで、それでも出来る限り急ぎ足で部屋の中へ入る。脳内には、最悪の状況が湧いたり消えたりしていた。

「藤木」

周りの乱雑さと同化しているようにうつ伏せで横たわっていた。

髪の毛には黒に混じって赤が見え隠れしている。

「藤木！」

藤木を抱きかかえ揺さぶり、張り裂けんばかりの声で叫ぶ。けれど、本当は触れた瞬間に判っていたんだ、もう笑顔を見せてくれることは無いんだと。

藤木の体をそつと床に置き、しばし呆然とする。まさか、自分の身にこのような惨劇が降りかかって来ようとは！

何分経っただろうか、やっと冷静さを取り戻しつつあり、真っ白だった頭の中にポツポツと明かりが灯り始める。落ち着け、落ち着いて整理するんだ。

まずすべき事は警察への連絡だ。そうすれば後はドラマで見たようにどつと人が押し寄せて捜査が開始されるのだろう。しかし、それでいいのか？他人ならいざ知らず、ごく近い人が亡くなったのだ。他人任せにしておくなんてことは出来ない。それに、俺にとって大切な人だったんだ。

冷静さを取り戻した後は藤木の無念な気持ちと犯人への憎悪で体が熱くなり、それはしばらく収まることはなかった。

素人探偵の捜査

考えた末、一通り部屋の状況を確認した後警察へ連絡することを決めた。警察が介入してくると、必要以上の情報なんて回ってこないだろうし。

荒れ果てた部屋をぐるっと見回し、どこから手を付けていいのか思案する。

まず手にしたのは財布。もちろん自前のハンカチで手に取り、指紋を付着させないよう気をつける。中身を見てみると、札入れの中が綺麗さっぱり無くなっていた。今日俺と遊びに行ったときは間違いないく数枚入っていた。それから買い物に出かけたとしても空にはなるまい。カード類は抜き取られた形跡はなし。運転免許証の写真を見て再び悲しみが湧いてきたが、グツと唾を飲み込むと同時に悲しみも一緒に飲み込んだ。

次に携帯電話を探す。自宅で取った時に聞こえたノイズの正体を確かめたかった。が、数分辺りを注意深く探しても発見することが出来なかった。現場保存の観点から、あちこちひっくり返して探すわけにもいかない。しばらく見て回ったがついに見つけることは出来なかった。

腕時計を見る。ここに来てから約10分経っていた。隈なく確認したいのは山々だが、自分一人で出来ることなど限られている。ましてや探偵気取りの学生に捜査のノウハウなど皆無だ。

自分の携帯を取り出し、警察へ連絡しようとした瞬間、ふと勉強机の上、閉じられたノートパソコンの電源ランプが点灯しているのが目に入った。

机のそばに向かい、ノートパソコンを開いてみると電源が入ったままだった。そしてキーボードには薄っすらと 血痕が。

藤木はパソコンの操作中に襲われたんだ。ワープロソフトの画面が開いたまま、そして何も書き込まれていないまま閉じられていた

ということとはワープロソフトを起動させた直後に殴打されたのか。パソコンのそばには花柄で彩られたティーカップが置かれていた。その中身は藤木がこよなく愛していたミルクティー。

何を書こうとしていたのだろうか。楽しいこと、嬉しいことを紡ぎたかったに違いない、美味しいミルクティーを飲んで笑顔を滲ませながらその内容を書き記したかったに違いない。しかし藤木にはそんなささやかな喜びも許されなかった。無情の鉄槌によって、希望の灯は儚く消え去ってしまった。

なんとなく何も書き込まれていない画面を眺めていると、書き始めの位置が初期配置ではなく丁度画面の真ん中に位置している点に気がなった。そしてその瞬間、脳の中に保管されている過去の思い出が電気信号となり一気に輝きを放ち始めた。

芝井君って推理小説好きだよね？

「ああ、好きだけど。何で？」

こつこつトリックって使えないかなあ、と思つて。

「へえ、刑法も怖いとか言つてまともに履修しない藤木の編み出したトリックか。お手並みを拝見させて頂きましょう」

からかわないでとりあえず最後まで聞いてよね。パソコンを使ったダイニングメッセージのトリックなんだけど、ワープロソフトや表計算ソフトって文字を打つて消したとしても『元に戻す』ってアイコンをクリックしたら又元通りになるじゃない？それを利用して被害者が瀕死の状態で何か犯人の手掛かりになる文字を打つて一旦『バックスペース』キーで消しておくの。犯人は被害者がまだ生きてたことにびっくりしてトドメを刺すんだけど、パソコンの画面には何も残っていない。犯人は何か残す前に仕留められて良かったって胸を撫で下ろし、又無用にあちこち触れるのを嫌ってパソコンはそのままにしておく。それを名探偵は逃さず犯人を追い詰めた、

ってという話はどう？

「論理的な破綻は無いけど、少し押しが弱いかな。例えばそのダイイングメッセージは実は犯人が弄したもので普段から憎々しく思っていた奴になすりつけようとした。そしてアリバイ工作もして完璧だと思っていた犯人だが、僅かなほころびから名探偵に全貌を暴かれてしまった、なんてストーリーはどうだ？」

どうって言われても。別に私が小説を書くわけじゃないんだし。でも気に入ってくれたんなら上げるよ。その代わり、その小説で賞金取ったら山分けだからね。

こめかみを指で押さえながら記憶の糸を辿る。次に記憶と現状を照合してみる。『元に戻す』というアイコンが一際異彩を放ち、存在感をアピールしていた。

指紋が付かないようにマウスを操り、アイコンを押してみる。指の震えが止まらなかつたのもう一方の手で押さえながら慎重に操作する。一回目クリック、『3』。二回目クリック、『0』。三回目クリック、『1』。四回目クリックしようとしたら『元に戻す』というアイコンが消えていたので、打った文字はこれで全てということになる。

『301』は何を表しているのだろうか？

小さく唸って考えていると、不意にハッと我に返る。考えている場合じゃない、早く警察に連絡しなければ今度は俺に有らぬ疑いがかかる虞が生じてくる。ただでさえ鎮痛な出来事の上、痛くも無い腹を探られるのは耐え難い苦痛だ。

パソコン画面に浮き出た文字を元の無字の状態に戻した後、一旦ポケットにしまった携帯電話を再び取り出し警察へと繋いだ。状況を説明して通話を終わると、ホッとしたのか大きなため息とともにへたり込んでしまう。眼下には、つまらない俺の冗談に付き合っ

くれていた彼女の姿が視界に入り、泣きそうになった。

事情聴取 1

連絡してから十数分経っただろうか、何の合図もなしにドアが開く音が聞こえ、警官二人が無遠慮な足音で近寄ってくる。

「連絡をくれたのは君？」

一人が無言で頷く俺の方を見て、もう一人は足下に横たわっている遺体を確認して顔を歪めた。少し周りを見回した後、先ほど話しかけてきた警官が俺の身分と発見状況を聞いてきたので、ありのままを答えると 捜査したことは言わなかったが 横目で相棒に合図し、どこかに連絡させていた。多分この警官達は事の真偽を確認するために派遣された近くの交番の巡査なのだろう。そしてこの後刑事やら鑑識やらがやってくる、ということなのだ。

しばらくの間、警官達はこの部屋だけでなくバスルームやトイレなどを確認していたので一人黙って佇んでいると、乾いた革靴の足音とともに数人の男性がなだれ込むように狭い廊下を歩いてきた。先ほどの巡査が敬礼をしているところを見ると、真打ち登場、ということなのだろう。

「第一発見者はあなたですね？」

ブラウンのジャケットを羽織った、いかにも『刑事です』といったいでたちの男が問いかけてくる。背が低く小太りの愛嬌ある姿とは裏腹にギョロツした目つきでなめ回す様に俺の表情を見てくる。

「私はこの事件の担当刑事の醍醐という者です。こちらは部下の北島」

北島と呼ばれた刑事は神妙な面持ちで深々とお辞儀をしてきたので、俺も愛想程度に頭を下げた。

「遺体発見時の状況をお伺いしたいのですが、よろしいですか？」

顔つきに似合わず丁寧な言葉遣いで話してくる。またも無言で頷くと醍醐の方も、よろしい、といった感じで頷く。横では北島がいそいそと手帳を取り出そうとしたが、あっと小さく口に出した後落

としてしまい醍醐にたしなめられていた。

「え、まず被害者とはどのような関係ですか？」

「大学の友人です」

「友人 ですか」

一瞬顔色を変えたが、それを悟られまいとすぐに下を向き考え込むようなポーズをとった。白々しい。言外に、友人ではなく恋人ではないのか、と聞きたいという意思がはっきりと伝わってくる。

しかし、刑事達も一旦は俺の話聞いてみようと考えたのか、それ以上突っ込まれることもなく次の質問へと移った。

「どのような用件でここに足を運ばれたんですか？」

「1時間ほど前藤木から電話がありました。話しかけても応答しませんでした。掛けてきたのに応答が無いことを不審に思って、ここまで来たんですがインターフォンを押しても返事が無い。もしかして外から掛けて電波が悪かっただけかもしれないと思い引き返そうとしたんですが、何の気なしにドアノブをひねると簡単に開いてしまいました。これは何かある、と思い中へ入ったらこのような状況でした」

抑揚のない口調で淡々と答える。話している間も刑事は鋭い視線で表情を観察しており不快に思ったが、それを表に出すことは無かった。

「失礼ですがあなたのご自宅はどちらですか？」

不意に予想外の質問が飛んできたが、あくまで無表情を貫く。

「ここから電車で二駅いったところですが、それが何か？」

「電話の応対に少し違和感を覚えて、何十分もかけてここまで来られた？」

覗き込むような表情で尋ねてきた醍醐の真意が読み取れて少しホツとし、薄ら笑いを浮かべ応じる。

「藤木は明るく真面目な性格で今までこのような電話の応対はありませんでした。先ほどは言いませんでしたが、今日は藤木とドライブに出かけていました。買い物をしたい、と言って駅前で別れまし

だが、すでに外は暗かったので女性の一人歩きで何かあったのでは、という思いもしたので余計に不審に思いました」

醍醐は一応納得した様子ですまし顔をきめこむ。

「そのドライブというのはお二人で？」

「はい」

「なるほど。遺体発見時はすでに部屋はこのような荒れた状態だったわけですよね？」

「当然です」

何を言い出すんだこの刑事は、と睨みつけるような表情で答える。

「他の物には触られなかった？」

「それは判りません。藤木が倒れているのを見て頭が真っ白になりましたから」

「遺体には触ったんですね？」

「はい。今は仰向けになっっていますが、発見時はうつ伏せで倒れていました。私は彼女がまだ生きていることを信じ、体を揺さぶったりしましたが、脈が無いことを確認すると今のような状態にしたまま警察へ連絡しました」

「発見時はうつ伏せ ね」

醍醐が呟くそばで北畠が慌ただしくペンを走らせている。

「ここに来たのは何時？」

「詳しい時間は判りませんが、ここに着いてから15分前後で警察に連絡したように思います」

「連絡するのに15分もかかったのですか？」

醍醐が驚いたような表情でこちらに視線を向けた。

「はい。先ほども言いましたが、ドアが開いていると知るまでインターフォンを何回か押して待っていましたから、その時間も含めてですよ」

本当は捜査に時間を費やしていたのだが、話がややこしくなるので伏せておいた。醍醐も少し唸って腕組みをしている。

「警察へ連絡後はどうしてましたか？」

「ただ待機していただけです」

「何も触っていない？」

「たぶん」

お互い砕けた言い方になり始めていることに苛立ちが感じられた。相手も俺に対して感じているだろうが、この刑事とは合いそうもない。

「以前この部屋に来たことは？」

「二、三度あります。何の用事で来たのかは忘れましたが」

肩をすくめて首を振ると、醍醐は苦々しく口元を歪ませた。

「学校の友人だそうですが、被害者が誰かに恨まれるような心当たりはありますか？」

「いえ。さつきも言ったとおり藤木は真面目な性格で恨まれるような人物ではありませんし、私が知っている範囲では友人も多く交友関係も良好でした。そのようなことは考えられませんね」

「あなたは？」

「は？」

醍醐の言っている意味が判らず、問い直す。

「あなたは友人が多い方ですか、と聞いているんです」

「それが事件と関係があるんですか？」

「参考までに」

「私は藤木みたいに人望があるタイプではないので片手で十分足りませんが」

醍醐は、さもありません、という表情を浮かべ薄っすらと笑った。その表情を見た瞬間、こいつは俺に恥をかかせようとしたのだな、と悟った。会って1時間も経たないうちに、両者の溝は決定的なものとなっていた。

「もういいですか？」

わざとらしく時計を確認し、切り上げたいとアピールした。

「ええ。今日のところはこの辺でいいでしょう。足元に散乱している物に気をつけてお帰りになって下さい」

今日のところは、という言葉にアクセントを置き、他の場所へと歩き出した。

「遅くまでありがとございました」

ドアに向かって歩きかけた際、北畠がお辞儀をして話しかけてきた。

「いえ、こちらこそ失礼しました」

北畠に倣い深々と頭を下げ、藤木宅を後にした。

刑事にも色々いるもんだ。北畠という刑事とはうまくやっていけそつだ、などと考えながら帰宅の途についた。

事情聴取 2

刑事に呼ばれたのは事件から3日後の昼。講義の途中に鳴った電話番号を休み時間に掛けてみると、出た相手は憎き　という程でもないが　醍醐刑事だった。お忙しいところ申し訳ない、などと皮肉を言われながらも、こちらとしても情報が欲しかったので残りの講義をすっぱかして待ち合わせの喫茶店へと向かった。ドアを開けると、刑事達がいる所にだけ喫茶店の雰囲気溶け込んでいない異色の空気が流れていたので直ぐ判った。前で立ち止まり軽く会釈すると、二人の刑事　醍醐と北畠　は向かいの席に座るよう促した。

「授業に差し障りはありませんか？」

醍醐が愛想笑いととも皮肉る。

「藤木のような優等生でもない私が講義の一つや二つ休んだところで何にも変わらないですから気を遣ってもらわなくても結構ですよ。それより、早く中身に入りましょう」

社交辞令はもういいからちゃんと仕事してくれよ、というメッセージ。醍醐もそれに気付き、ふん、と鼻を鳴らす。相変わらずいい好かない野郎だ、といったところだろう。

「捜査をしていくうちに事件の概要が臙げながら見えてくるようになります」

相槌を打ちながら話に集中する。自分の知らない情報がどれだけ出てくるのか、そして警察がどのような見解をもっているのかを確認しなければならぬ。

「まず目に付くところは物色した形跡が見られるところ。さらに財布の中身はカード類と小銭はありましたが、紙幣はありませんでした」

「物取りの犯行、ということですか」

合いの手を入れるが醍醐は首を振る。

「結論を急がないで下さい。ここで確認したいのは、事件当日ドライブへ出かけていたというあなたが藤木さんの財布の中身を知りえたか、ということですよ」

「詳しい金額はわかりませんが、少なくともドライブに行っていた時点では紙幣は入っていました。しかし前も話したとおり、私と別れた後に買い物に行くと言っていたので、どこへ行き何を買ったのかまでは把握できない時点で事件発生時も札入れの中は空だった、と断言することは出来ません」

「その紙幣は一万円札だった？」

「藤木の財布を覗き込んで見たわけじゃないから判りかねます」

「複数枚入っていましたか？」

「一枚ではなかったように思います」

醍醐は、一息つくかのようにコーヒークップに手を伸ばした後、話を続ける。

「藤木さんはあなたと別れた後、駅前のスーパーで食料品を購入したようです。室内から派遣された事件当日のレシートより店、時間、購入金額が判明し、冷蔵庫の中から購入したと思われる品がありました」

「因みに購入金額はいくらなんですか？」

「967円です。藤木さんは頻繁に買い物に行くタイプの人のようですね。冷蔵庫の中身もほとんどがその日に買ったものでしたし、直近のレシートがあっただけで確認したら同じスーパーのレシートで2日前でしたから」

「どうですか、と言わんばかりに返事を待っていたが、俺は「さあと素っ気無い対応で首を傾げて見せた。」

「次に確認したいことはあなたが藤木さんから受けたという携帯電話の存在です。それは確かに藤木さんからでしたか？」

「はい、断言できます」

自分の携帯電話を取り出し、着信履歴を見せる。

「その携帯番号を写させてもらってもいいですか？」

どうぞ、と携帯電話を差し出すと北島の首がニョロツと伸びてきて画面とメモ帳とを交互に見ながら素早く転記した。北島から「ありがとうございます」と馬鹿丁寧にお礼を言われた後、ポケットの中にしまい込んだ。

「声は聞きましたか？」

「いえ。前も言いましたけど、掛けてきたのに無反応でしたから不審に思いました」

「何か気付かれたことはありませんか？例えば後ろの方でスーパーのアナウンスが流れていたとか」

「そういう確信の持てるようなことはありませんでしたけど、通信が途絶える瞬間に何か擦れる音を聞いたような気がします」

「電話はあなたからではなく、あちらから切ったのですね？」

「はい。私は最初、藤木が電波の悪い場所にいるのかなと思って頻繁に呼びかけていましたから。何度目か呼びかけた後にノイズのような音が聞こえて通信が途切れたんです」

ウェイトレスが注文したコーヒーを運んできたので不自然に静まり返りぎこちない雰囲気を作っていたが、ウェイトレスはそれに気付かず、一礼をすると無表情のまま去っていった。

「どのような携帯電話でしたか？」

ウェイトレスが完全に視界から消え去ったのを確認してから醍醐が話を再開させる。

「銀色で開閉式の、いたってオーソドックスな携帯だったように記憶しています」

北島がその情報に食いつくようにペンを躍らせる。ということはお。

「携帯電話が発見されていないんですね？」

醍醐に話しかける。こちらから投げかけられたことを不快に思ったのか、少し口を歪ませながら応じた。

「ええ。携帯電話は情報の塊ですからね、今全力で探しているところですよ」

「犯人が持ち去った可能性が高いとお考えですか？」

今度は口だけでなく、表情も歪ませた。

「今のところは何とも。それとも、犯人が携帯電話を持ち去った、ということに心当たりでも？」

つくづく嫌味な刑事だ。俺が普段から藤木の携帯を盗み見していたとしても言いたいのだろうか。

「いえ。犯人にとって都合が悪かったので持ち去った、という一般論に基づいての発言です。お気になさらずに話を続けて下さい」

手を広げて先を促したが、閃いたことがあったので再び口を開く。「そもそも犯行現場は、あの部屋、と考えていいのでしょうか？」

「と言いますと？」

「私達は部屋の散らかりようと遺体の存在から、あの部屋で犯行が行われた、という前提で話を進めています。犯人が別の場所で被害後遺体を運び、物取りの犯行を装うために室内を荒らした、という可能性も否定できないと考えたものですから」

醍醐は俺の説を否定するかのように片頬を吊り上げ、首を大きく左右に振った。

「その可能性は極めて低い、と言わざるを得ません。まず第一に遺体を5階まで運ぶことに大きなリスクを背負ってしまう。いくら夜で暗かったとはいえ、マンションの廊下には電灯が点いているのでこの住人はもちろん、他のマンションからも発見されてしまう虞がある。第二に、殴打された際に飛んだと思われる血痕が部屋に飛散していました。以上の理由から、犯行はあの部屋で行われた、と言っても過言ではないでしょう」

「ということは、死因は撲殺ですか？」

俺が藤木の様子を見たときに後頭部を殴られた跡のようなものは確認していた。

「いえ。直接の死因は頸部圧迫による窒息死です。おそらく殴打されて昏倒した後に首を絞められたのでしょう」

即死ではなかった、ということだな。頭の中では事件当日確認し

たパソコン画面の『301』が浮かび上がっていた。

「血痕はどこに飛んでいたんですか？」

「そんな細かいところまで、やけに気になさるんですね」

意味ありげな笑みでこちらの表情を窺っている。

「被害者が友人なら気になるのも当然のことだと思いますが」

「まあいいでしょう。血痕はフローリングと散乱した物に付着していました。従って、犯人は室内を荒らした後被害者を殴打したということになります」

「他に血が付着していたところはありませんでしたか？」

俺は閉じられたノートパソコンのキーボードに血が付着しているのを確認している。警察が見逃しているはずはない。

「他、とはどういうことでしょうか？」

醍醐はわざとらしく首を傾げる。ニヤリとした口元は獲物が罠にかかったことを喜んでいるようにも見えた。

なるほど。醍醐はわざとパソコンに付着した血痕のことを言わず、俺を嵌めたつもりでいるんだろう。『なぜ、他の場所に血が付着していることを知っているのか』と。

「事件当日のことを考えていて思い出したことがあるんですが、私はノートパソコンが閉じられているのに、電源のランプが点灯していることを不思議に思い一度開閉しています。その際血のようなものを見た記憶があったんで確認したかっただけです」

「ほほう、思い出したことが。他にはもうありませんか？」

大袈裟に感心したような素振りで返答を待ち、俺が「別にないです」と言うと、その答えに満足したのか小刻みに何度も頷いた。

「では今度はこちらから確認させて頂きます。事件当日、あなたは藤木さん宅の前で何回もインターフォンを鳴らし佇んでいた、これは間違いないですね？」

「はい」

「何分ぐらい？」

「さあ。5分だったかもしねないですし10分だったかもしねない

し」

関心無さそうな口調で返答する。

「5分前後だった、と考えていいわけですね？」

「まあそんなもんじゃないですかね。やけに拘っていますけど、それが何か問題なんですか？」

「問題です。事件当日藤木さん宅前であなたを目撃した人がいます、その人の話ではインターフォンを鳴らしたかどうかは見えていないが、比較的早い段階で室内に入っていたと言っています」

「そんなはずはない！」

思わず語気を荒げた後、周囲の視線を感じたので動揺を抑えるように深呼吸する。

「そこに関しての記憶は明確です。確かに何回もインターフォンを押ししましたし、しばらく様子を見ていました。誰なんですか、目撃者というのは？」

「それをあなたに言う必要はありません。ここで大切なのは事の真偽のみです」

先ほどのパソコンの件と相なり、醍醐は俺に対する疑いを濃くしたようだ。この状態ではどんな弁解をしても、醍醐には戯言にしか聞こえない。

「そうですね。それでは私からは、その目撃者の発言は嘘だ、ということだけ言っておきましょう。刑事さんたちは何やら疑っているようですから先にことわっておきますけど、私は犯人じゃない。これから詳しく捜査されるでしょうから最終的に潔白は証明されるでしょうけど、無駄な事に時間を費やさないで下さい」

「肝に銘じておきましょう」

これが解散の合図となり、立ち上がって支払い用紙に手を伸ばすと醍醐が素早く掠め取る。

「刑事が饗応をつけることは禁じられていますからここは私のオゴリで構いません」

表情を変えずにレジで精算を済ませると、「では」と言い残し北

畠を連れて歩いていった。

陽はだいぶ傾き、陰を多く作っている。外気の肌寒さに震えを覚えながら駅へと歩を進めた。そして歩きながら考える、明日はどこから捜査しようかと。

醍醐が俺を疑うように、俺の警察に対する不信も色濃くなった。

自分自身で身の潔白を証明するしかない、そう決意して家路についた。

調査開始

次の日の朝、やって来たのは学校ではなく藤木のマンション。自由に動けるときに動いておかないと、刑事に邪魔されてしまいそうだ。周りを見渡してもそれという人は見当たらないが、十中八九監視がついているだろう。なんといっても俺はあくまで警察の見解では 容疑者の最有力候補なのだから。

昨日、醍醐との話で重要な情報を手に入れた。それは藤木宅前での証言の食い違いだ。自身の行動に間違いは無いことを知っているので、俺を目撃したという者が嘘をついていることは明白だ。それが故意かそうでないかは判らないが、話しの流れから見れば警察をミスリードしている印象を受けた。つまり、その証言者が事件に関わっている可能性は極めて高い。しかし、このことを醍醐に話しても一笑に付されてしまうだろう。あくまで自分の推理でそこまで辿り着かなくてはならない。

そこで思い出されるのが「301」だ。これが何を意味しているのか。警察はこのダイニングメッセージに気付いているんだろうか。まあ気付いていたとしても、対して気にも留めないだろう。犯人はすでに網中でもがいているだけ、と考えているのだから。

しかし俺にはこの暗号が、藤木が最後の気力を振り絞って残したメッセージであることを確信している。藤木が考えたトリックを犯人がその場で思いつき、実行に移す可能性はゼロに等しい。

マンションの玄関まで行ったが、そこで立ち止まってしまふ。オートロックシステムのため住人以外は入れないようになっていたのだ。

少し考えた後、郵便受けがあるところへ向かった。戸数が多いのでこのように銀色の郵便受けがズラッと並んでいる姿は、異様に見える。何かしら壮観でもある。

しかし、ほとんどの郵便受けには部屋番号のみでネームプレート

は無かった。まあワンルームマンションなんてどこでもこんなものだ。さして期待はしてなかったけど、早くも暗礁に乗り上げた。

しばらくその場で腕組みしながら考え込んだ。しかしそんな都合よく良い知恵など浮かんでくるはずもなく、小さく唸りながら踵を返すと、そこに北畠の姿があった。

「何をなさっているのですか？」

やはり尾行がいたか。犯行現場でコソコソ何をしているんだ、と確認しにきたんだろう。

「別にたいしたことじゃありません。このまま放っておくと冤罪で拘束されるのではないかと思い、小心者の私はじっとしてられなくなっただけです」

警察の動きを揶揄すると、北畠はふつと笑った。醍醐のような何かを探るような笑みではなく、自然に出たような笑顔。

「刑事がいたことにも驚かなかつたですね」

「むしろいない方が不自然とさえ思いました。見知った顔が出てきてホツとしたぐらいです」

今度は顔を見合わせて笑った。北畠は醍醐と違って冗談が通じるタイプのようだ。まだ若そうだし、組織の毒気に染まっていないのかもしれない。

「で、先ほどの質問ですが、何をなさっていたんですか？」

「私は自分が犯人でないことを知っています。ならば真犯人がいる。ある理由からこのマンション内の可能性が高いと見て、氏名を確認しようと思ったのですが、郵便受けからでは無理みたいですね」

「ある理由、ですか」

北畠は眉間にしわを寄せて困惑したような表情をしている。刑事らしからぬソフトな応対と今の表情を見るとわかりやすい性格なのかもしれない。

「知りたいですか？あなた達は私が怪しいと思っているわけですから、私が容疑者候補から外れればまた一から対策を練り直さなければいけない。対応は早ければ早いほど良いのは言うまでもないです

よね」

北畠はより一層顔がしわくちやになつて考え込んでいる。この人刑事に向いてないんじゃないか？

「情報交換しませんか？私は自分が犯人じゃないことを論理的に証明してみせますから、代わりに藤木の家の周りの住人の氏名を教えてください。これで対応が早くなれば安いものだと思いますが」

この誘惑はかなり効いたようだ。グラグラと揺れ動いている気持ちに手が取るように判る。

「しかしあなたの言ったことがデタラメならこちらが情報を垂れ流しただけになつてしまいますよね」

独り言のように呟く。

「ではこうしましょう。私が先に犯人じゃないという理由を話します。北畠さんがそれに納得すれば住人の氏名を教えてください。これでどうですか？」

トドメの一撃。北畠はゆっくりと頷いた。

「じゃあ私から。醍醐刑事と話している際、私は自分に不利になるような発言を多々しています。私が容疑者なら自ら進んでそのような話しをするでしょうか？」

「私達を油断させるためかもしれません」

北畠も、そう簡単に折れるわけにはいかない、と刑事としてのプライドを覗かせる。

「確かにそういう見方もできますね。次に、発言だけじゃなく状況も私にとって随分悪い。まず、わざわざ会いに行つて第一発見者になつている点。私が殺害したのならわざわざ警察に通報せず立ち去ればいい。そうすれば誰かが尋ねてくるまで発見されないでしょう。最低でも一日二日は稼げたはず、これはかなりのメリットです。私が犯人なら、なぜそうしなかつたのでしょうか？」

北畠は指で顎を触りながら俯いて考えている。しばらく悩んだ後、スツと顔を上げ話し始めた。

「第一発見者を装うことで被害者に会いに来た、ということ的印象

付けたかったのかもしれない。実際のところ、あなたが何をしに被害者宅に来たのか、ということはあなたの話のみでしか証明されていません。会いに来たのか、危害を加えにきたのか、私達には判り得ません」

「しかし私の携帯電話には藤木の着信履歴が記録されていましたよね。私が自分の意思で藤木の家に行ったというのなら、送信履歴に記録されていないと辻褄が合わない」

「しかし被害者の携帯電話は発見されていません。自分の携帯になら何らかの細工をすることは可能だと思います」

逆説の応酬。北畠も伊達に刑事をしていない。それとも醍醐の入れ知恵か。

「なるほど、わかりました。最後は物的証拠で勝負しましょう。私を目撃したという住人は、私が部屋に入って藤木が倒れているのを発見し警察が来る間部屋から外に出た、と証言していますか？因みに私は出ていない、と証言します」

「いえ、そこまでは」

「そうでしょうね。下手に嘘を重ねると見破られてしまいますからしかし既に勝負は決している。私が警察が来るまで部屋を出ていないのなら、携帯電話と扼殺した凶器をどうやって隠滅したのですか？あなた達は犯行当日から私を監視しているのでしょうか。私は証拠品を隠蔽するような動きをしていましたか？していないなら犯行現場が自宅にないとおかしい。どうぞ私の家を検索して下さい、これで潔白は証明される」

自信に満ち溢れている姿に気圧されたか、単に論破できないからかしばらく固まったままだったが、やがて一息付くと笑顔でこちらに顔を向ける。

「そう言えばそうですね。最後の物証については説得力がありません。現時点で令状を取ることは難しいので家宅捜索はできませんが、あなたの態度から、おそらく何も出てこないでしょう」

「納得して頂けましたか。では、次は北畠さんの番です」

約束したので仕方ない、というのが見え見えの渋った顔でゆつくりと手帳を取り出す。

「言ってるいいのかな」

「大丈夫、警察関係者以外も遅かれ早かれ手にするような重要度の低い情報です。何てことはありません」

軽い口調で背中を押すと、北畠も意を決したように手帳を捲り記載箇所を見せてくれた。

「へえ、全世帯の姓名を纏めているんですね。真面目な北畠さんらしい。私は近所の人だけでいいですから、直ぐ終わります」

ノートを取り出し、書き写す。505号斉藤四郎、506号三田弓子、507号渡辺亘一、508号は藤木宅だから飛ばして、509号佐藤順二、最後の510号は山田一男。

「有難うござい、あつと、もう一回」

手帳を閉じようとした北畠を制し、もう一度覗き込む。301号は、山藤一彦、と。

「有難うございました、参考にさせていただきます。これでここでの調査は終了しますが、どこか喫茶店でも入って一服しますか？」

丁度コーヒーが飲みたかったので誘うと、とんでもない、とばかりに両手を振った。

「いえいえ、監視している相手と仲良く喫茶店なんか入って談笑していたら、上司になんて言われるか」

「上司がなんだって？」

明らかに異質の声が聞こえたので二人同時に振り向くと、北畠を睨んでいる醍醐刑事の姿があった。途端に北畠の姿勢がピンと強張り、目が泳いで動揺しているのが見て取れる。

「奇遇ですな、私達の仕事場であなたに出会うなんて」

俺には愛想笑いで応対する。醍醐の態度から今しがた到着したばかりで、住人の姓名の件は聞かれていないようだ。少しホツとしたが、北畠は内心大きなため息を付かんばかりに安堵していることだろう。

「そうですか？一応私も関係者の一人ですからいても不思議じゃないとは思いますが」

察するに北畠と醍醐はここで落ち合う算段だったのだ。醍醐が早く仕事を終えたのか北畠が忘れていたのかは判らないが、意見交換をしようと考えていたのだろう。

「北畠と何か話をしていたみたいですが」

醍醐が探りを入れてくるが、真面目に付き合う必要はない。

「単なる世間話ですよ。最近暖かくなってきたので捜査もし易くなつたでしょう、とか。ああ、決して北畠刑事を責めないで下さいね、私が一方的に巻き込んでしまったものですから。貴重な時間を潰してしまつて申し訳ない、私はこれで失礼します」

深々と礼をするとその場を去つた。力強い足取りで帰っていく俺を怪訝そうに見つめている醍醐と、まだ目が泳いだままであろう北畠の顔を想像して、思わずプツと吹き出してしまった。

推理 1

「さて、と」

先ほど北畠から教えてもらった住人の名前を書き写したノートを開いて考え込む。この解が犯人を示している、そう信じて。

死にゆく被害者が何を考えているかなんて到底判り得ないので突飛な行動をとったとしても決して驚くようなことではない、と言った作家がいた。確かにそれは否定できない。だが藤木は文字を残すだけでなく、その文字を『消す』作業もしている。そこには藤木の明確な『意思』があり、前述の状況と異なる点でもある。やはりダイングメツセージと捉えるべきであろう。

ウエイトレスがコーヒーを運んできたので、反射的にノートを手で覆ってしまう。別に見られても問題ないのだが、体が勝手に動いてしまった。ウエイトレスは怪訝そうな表情をしながらも、あまり係わり合いたくないと思ったのか、足早に立ち去った。

コーヒーを一口含ませた後、再び考え始める。

藤木の性格からして、突拍子もないことを書いたとは思えない。論理的に説明できることを残したのだ、ということはこの暗号を解く大前提となる。

大前提といえ、藤木が知った顔、或いは特徴や名前であることも注視しなければいけない。ダイングメツセージとは何かを伝えたいために発するものであり、全く見ず知らずの通り魔的犯行なら書きようがない。これも犯人は藤木が住んでいたマンションの住人である、という有力な根拠の一つだ。

それらを頭の中で再確認してから住人の名前を見渡す。都合の悪いことに、全ての住人の姓名どちらかに数字が入っている。しかし『301』がそのまま答えに通じているとは思えない。文字を打っている際に見つかればたちまち消去されてしまう。仮に見つかったとしても犯人に判らない形、それこそ前述の作家の話のように突拍

子もないことを書いたと思わせる必要がある。藤木もそう考えただろうか？自分が死ぬであろうことを悟りながら。

一つずつ考えていこう、急いで事は仕損じる。自分の論理だけではなく、藤木の思考に近づこうとするんだ。

そのまま受け取れば301号の山藤が一番怪しい。これは『やまふじ』と呼ぶのだろうか『さんとう』と読むのだろうか。『さんとう』なら『3』『10』となり構成される数字全てを含んでいることになるが、それなら残された文字は『310』になっていないと辻褃が合わない。301号の『さんとう』で構成される数字をアピールして整合性を確保しようとしたのか。

アナグラムを採用するなら509号の佐藤にも疑問を持たざるを得ない。何せ『310』は『さとう』と読めるのだから。しかも犯行当日、車中で話した会話の中でも話題になっており、ここに出てきてもおかしくはない。さらに505号の斉藤も範囲に入ってくるか。『さいとう』『310』、しかしこの場合だと『3110』の方が正しいような気がする。

文字を変換することによって見えてくる可能性もある。漢字に直すと『三』『零』『一』、三の文字を含む505号の三田、或いは507号の渡辺亘一、510号の山田一男、そして301号の山藤一彦。『零』は『0』かもしれない、通常漢字を使用する場合でも『0』の方をよく見かける。しかし『零』を『0』としても該当する人物は同じであり、ここから一人には絞り込めない。あえて言うなら部屋番の三と名の一とが重複する山藤か。

次は英語。『three』『zero』『one』、これをアナグラムmingしたら文章になるとか。『here』『zoo』、違うな。『the』『zone』『or』、無理だ。俺のボキャブラリーにも問題があるのだろうけど、全て使用して文字を構成させるのは難しい。特に『z』はそう使いまわしは利かない文字なので取掛かり易いと思えたが。もしかして『30』と『1』或いは『301』で考えるのかもしれない。『thirty one』もしく

は『three hundred one』、いまいちピンと来ない。今は措いとして、余力があるときに再考してみよう。

ローマ数字の可能性はないか。『?』、ローマ数字にはゼロの観念がないのでバラして考えることは出来ない。つまり『301』は『CCCI』になる。『CCCI』。なんだこりゃ、何も思いつかない。明らかにハズレだな。

これ以上深く考えることは無意味かもしれない。藤木に何か突出した特徴、例えば風水や占星術に凝っていたとかいうのなら話は別だが、至って普通の学生だったし、室内にもそんな趣味のものなど少なくとも藤木を発見したときには 無かつたはずだ。やはり『301』は藤木の個性と関係無く、独立して解けるものだと考えた方が無難だ。

後は301を一つの部分として考える事もできる。例えば、『3』と『1』を使って『引』にし、『0』を『口』に変えたり、『1』を横棒に変えて『0』と合わせて『日』にするとか。『引口』又は『口引』、これは意味無さそうだ。おっと、『弓』は三田弓子にながるかも。あとは『0』と『1』をどう組み合わせるか、難しいな。次は『3日』、『みつか』とも読めるな。みつか、みか、三田^た。かなり苦しい。

ノートにぐしゃぐしゃと落書きのように書いては塗りつぶし、コーヒーを飲んではため息をつく、という行動を何度繰り返したろうか。うーん、と首を回して肩の強張りを和らげようとしたら、手持ち無沙汰のウェイトレスがこちらの様子を窺っているような感じで胡散臭そうな眼つきをしていた。視線を向けるとパイとそっぽを向きカウンターへと入っていく。

コーヒーだけで長居しすぎたかな、と時計を見ると入ってから3時間あまり経過していた。まだ陽は高いが、後は自宅から学校へ行く気などしない 考えるか。

愛想の悪いウェイトレスと相対し精算を済ませて外に出る。春の日差しは日に日に元気になり、眩しい太陽を隠すように手庇を作り

空を見た。青地に白が流れていく風景を見ると、体の中にまで風が吹き抜けている感覚を覚える。そして、冷静になれるのだ。家に帰ったらもう一度気合を入れ直さなければ、と前を向き駅へと歩き出した。

自宅アパートに着き、ポケットから鍵を探している時「芝井さんと呼ぶ声がした。振り向くと見慣れた迷コンビ、醍醐と北畠の姿があった。おそらく待ち伏せしていたのだろう。刑事ドラマでいうところの「しつこいですね、刑事さんたちも」とため息混じりに吐き出す場面。俺もやってやろうか。

「すみませんね、お待たせさせてしまったみたいで」

余裕のある態度が気に入らなかったのか、醍醐の表情は硬くなった。北畠はというと、ニコツと笑って「こちらこそ何度もすみません」等と話しかけてくる。両極端の応対でこちらもどう接したらいいのか返って迷ってしまうが、それが狙いだとしたら正に名コンビである。

「そのノートはなんですか？」

見れば判るくせに空々しく醍醐が指摘してくる。

「ああ、思ったことを書き殴っているだけの他愛も無いノートですよ」

「拝見してもよろしいですか？」

やけに食いついてくるな、まあ見られてもどうってことないが。

「どうぞ」と醍醐に差し出した。醍醐は俺が喫茶店で書いては塗りつぶしていた落書きを、さも難問を解読するかのような険しい表情で見つめている。しばらくすると、ノートを開いたまま顔を上げた。

「これは、大学の講義で使用しているノートではないですよね？」

「もちろん」

そう返事した後、醍醐が片方の唇を吊り上げ笑った。人を小バカにしたような不快な笑み。

「それで、ダイイングメッセージの謎は解けましたか？」

ノートを閉じ、俺につき返してきた。さして驚きもしないが、やはり警察も藤木のトリックには気付いていたんだ。そして醍醐の態度を見ると、その内容には全く眼中に無いみたいだ。

「あれはダイイングメッセージだったんですか？興味深いことを書いているな、とは思っていましたが」

「とぼけなくても結構。それで301号の住人が犯人だと？それとも3や1に該当する人物を全員しよつ引きますか？あのマンションは律儀に全戸玄関のネームプレートに姓名が記名されていますから相当数の人数を拘束しなければいけません」

呆れ返った表情で手を広げ大袈裟な素振りを見せる。

「さあ、それは警察の判断でお好きにどうぞ。しかし、あなた方がどう考えようと私には確信していることがあります。その答えが知りただけです」

「それが『301』に隠されていると？あなたねえ、推理小説などにかぶれすぎなんですよ。現実はその甘い世界ではない」

「それを含めての答えを求めているんです。そして、何よりも私は藤木のことを信じている」

やや語気を強めたせいか、少し黙った醍醐だったが気を取り直すように咳払いをしてから話し出す。

「信じている、ですか。芝井さんは先ほども確信している、という言葉を発している。以前、藤木さんとの関係をお聞きしたとき『友人』と仰られていましたけど、本当はもっと親密な関係にあったのではないですか？」

醍醐の言葉に一瞬喉を詰まらせたように口をつぐんでしまったが、答えは決まっている。様々な想いがありながら伝えられなかった、守れなかった男は自嘲気味に笑いながら力なく返事する。

「いえ、ただの友人でしたよ。悲しいことにね」

推理 2

醍醐たちと別れ部屋に入ると、冷蔵庫のドアを開け、コーヒーをグラスに注いだ後それを机の上に置いて自分もドスンと腰を下ろした。何気なく机の上に投げるように置いたノートはすでに開かれていた。それが推理再開を急かしているようにも見えて苦笑した。

推理というものは合理性を重視するが、時によってその合理性が個性で左右されることも頭に入れておかなければならない。例えば、『右へ逃げる』と誰かに指図されたとしよう。素直な性格の人ならばそのまま右へ行くだろうが、平素から疑い深い、或いは慎重な性格の人は、その指示が罠かもしれない、俺を騙そうとしているのかもしれないと疑心暗鬼になり、あえて左に逃げる可能性もある。要するに、事を計るには相手の個性や技量に合わせて考える必要がある、ということだ。

それを踏まえた上で、もう一度状況を整理してみよう。まず藤木の性格。明朗で愛嬌があるが、反面真面目で古風なところもある。これはあくまで俺の印象論だが、今まで接した感じかというと間違いの無いところだ。友人に恨まれる、なんてことは皆無だろうが、あるとすれば男女のもつれ 言い寄られていた男による犯行や嫉妬に狂った女の犯行 とも考えられるが、警察がこの時点で俺をターゲットにしているということは、その方面で怪しい点は見出せていないと考えていいだろう。

それと藤木が残したダイニングメッセージについて考えてみると、？マンション外部の犯行なら一番怪しいのは俺である、？藤木の見知った人物である、という仮説が導き出せる。そして俺は犯人ではないので、マンション内部で藤木が知っている人物、つまりマンションの住人が犯人である可能性が濃厚である、ということが言える。今まで藤木からマンション住人についての話題なんて聞いたことがないので、普段から親しく近所付き合っていた、ということとは

なさそうだ。まあこれは俺にも言えることだがワンルームマンションに住んでいる人なんて隣りに住んでいる人の顔も知らない、ということではザラにある。

そして本題の『301』、これが何を表しているのか。さっき喫茶店で考えたことを思い出ししてみるが、どうもしっくりこない。もしかしたら醍醐が言うとおり深い意味は無いのかもしれない、と弱気の虫が出てくるが、そこは藤木を信じて追究するしかない。考えなければいけないのは、このままで考えるべきなのかどうか、ということ。あるいは並び替えなければいけないのか、変換しなければいけないのか。ここにこの暗号を解く鍵があると言っても過言ではない。藤木がどう考えたのか、その思考に。いや、逆も考えられる。つまり藤木が俺の思考に近づいた、という可能性。希望的観測を含ませても、限りなく低いと考えた方がいいが否定はできない。そうであって欲しい。藤木にとって、俺がこの謎を解く資格を有している最も近い人物である、と黙っていて欲しい。

しかし、思い詰めれば詰めるほど頭の中は硬直化し、最終的には机に突っ伏した形で考え込んでいた。

ドン、というドアの閉まる音でハッと顔を上げる。壁の向こうではドタドタと人が歩く音が聞こえてくる。どうやら、隣人が仕事から帰ってきたみたいだ。

時計を見るともう午後6時半。朝早く起きたせいもあるのか、少し眠ってしまったようだ。目を覚ますようにとコーヒーをゴクリと一飲みすると、もう一度ノートに目をやる。もう何回目かわからないが、推理再開だ。

といっても、住人の名前とダイニングメッセージとを見比べることが出来ない。何度となく見回して、見飽きた文字列。

コーヒー一杯では目がシャキツとしなかったのか、瞼が重く文字が化けて、或いはぼやけて見えた。今日はお開きにした方がいいのかもしれない、と弱々しく笑っていると、無意識にその内の一つの文字列に反応し、一気に目が覚めた。そしてノートに書き殴ると、

今度は自分でも気持ち悪いと思えるほど目尻を下げてニヤリ、と笑った。なるほど、これかもしれない。これなら俺が並べた条件とも合致するが、确实とまでいくか？

しかし立ち止まってもいられない。今度はカバンから自分のノートパソコンを取り出し、パソコンとプリンターの電源を入れた。そして一心不乱にキーボードを叩き始めた。

封筒に宛名を書き、急いで外出の支度をして早足で駅へと向かう。早く答えに辿り着きたいという欲求が足に伝わり、自然と早足が駆け足にまで変化し、次第に息が荒れてくる。駆け足のまま十字路を直角に曲がる。そしてその後直ぐにクルツと反転した。

すると、ドンと人にぶつかった。その人は驚いた様子でこちらを眺めている。俺もその衝撃によるめいたが、柔らかな表情で話しかける。

「待ってましたよ。北畠刑事」

北畠は息を整えながらこちらの様子を窺っているが、尾行については俺も知っているという前提で張っていたのだから、すぐに落ち着きを取り戻す。

「いやあ、急に走るもんだから慌てました。もし見失ったりしたら、醍醐さんに大目玉ですよ。もう少しこちらの事情も酌んでくださいよ」

何度も対峙している内に両者は完全に打ち解けていた。北畠は俺が犯人と考えているかどうかは判らないが 容疑者を追い詰めて逮捕するというタイプの刑事ではない。

「良い運動になったでしょう？何事も体が資本ですから」

微笑みながら話すと、北畠も「そうですね」と言って笑った。

「どちらへ行かれるんですか？」

一つ咳払いしたあと北畠が尋ねてくる。まあ当然の問いだ。

「藤木のマンションに行こうと思ひまして」

「こんな遅くに？」

俺が何を考えているのか判らず困惑しているようだ。

「ええ。遅くなったのは私の能力不足の為せるわざですから仕方なかったのですが、早くこの事件を解決したいと思うと、いてもたってもいられなくなつたもんで」

「えっ、解決!？」

北畠は頭の上から出たような声を出した。その表情は狐につままれたようになっていて面白い。

「はい、まあ。しかし合点がいかない箇所もあるので少し畏をこしらえようと思ひまして」

「危険なことをするんじゃないでしょうね？」

北畠の視線がにわかには鋭くなる。北畠にしてみれば尾行していた容疑者に死なれたら、責任問題になることは避けられないので必死になる気持ちもわからないではない。

「それは判りません。相手が極悪、凶暴な人物であれば、私が返り討ちにあう可能性は十分にありますから」

「それはいけない。そういうことなら行かせるわけにはいきません」
北畠が断固たる口調で話す。

「そうなんですよ。私もそう簡単に死ぬわけにはいきませんからね。そこで最初の話に戻るんですが、北畠刑事を待っていたんですよ」
「待っていた、私を？」

「北畠刑事。手柄が欲しくはないですか？」

話の内容についていけず、キョトン、と固まっている北畠の表情をよそに、不敵な笑みを浮かべて返事を待った。

芝井は誰が犯人だと推理し

たか？

(但し、勘やあて推量ではなく一定の合理

性を有するものとする)

推理2（後書き）

ヒント

? 犯人はマンション住人の内の誰かである

? 暗号を解くヒントは全てストーリー上で説明している

（解き方だけでなく藤木の性格やマンションの特徴等も含めて）

謎解き

その人物は暗い境内を注意深く、ゆっくりと歩いていた。敷き詰められた砂利の音も鳴らさないよう、つま先立ちになっていた。賽銭箱近くまで来ると本堂を背にして辺りを見回す。しかし、本当に真つ暗だった。すべてがシルエツトに見え、風でなびく木々の動きにさえ敏感に反応してしまう。

時計を見た。発光式なのでこれだけは鮮明に確認することが出来る。こんなことなら懐中電灯も持つてくればよかった、などと後悔しても遅い。時計の針は午後10時前を指していた。待ち合わせは10時と指定されていたわけだから遅れちゃいない。一体誰なんだ、こんなところに呼び出しやがった奴は。ワープロ文字に冷徹なイメージを描き、事の信憑性を増しているようにみえたので、そいつは真実を知っているのかもしれない。だからこそ俺もここに来たのだが。こんなことで俺の人生を狂わされてたまるか。今でこそ派遣社員という立場に甘んじているが、いつかビッグになって世間や見下していた奴らを見返してやるんだ。

もう一度時計を見る。針は午後10時を指そうとしていた。

「良かった、良かった。私の推理が合っていたみたいでホツとしました」

明るい口調で話しかけると、男が待っている本堂へと歩き出した。砂利の音がひと際大きく響き、その音が近づくに比例して心臓の鼓動も大きくなっていった。相手は影が大きくなるにつれて警戒心を増しているようだ。身構える仕草が次第に硬くなっていく。

「はじめまして、と言った方がいいのかもしれないね。私はあな

たのことが知っていますが、あなたは私の姿は知っていますが名前は知らないでしょうし。私は芝井と申しまして、あなたの住んでいるマンションで殺害された藤木茜の友人です。ここまで説明すればここへ呼び出した主旨は理解してくれるでしょう？」

男は答えない。

風が強くなってきたようだ、空気を切る、ヒュウ、という音が耳元で聞こえた。

「わたしからの手紙は読んでくれましたね。まあ、読んだからこそここに来れたわけですが。回りくどい言い方はしたくないので単刀直入に言わせてもらいますが、あなたがこの事件の犯人ですね」

語尾は上げずに、逆に強める。つまり疑問文の「ね？」ではなく強調の「ね」。戦いのゴングは鳴らされた。

「おいおい、待ってくれよ。俺はただ変な手紙の内容が気になって来ただけだ。それだけで犯人扱いはないだろう？」

ここに来たことが犯人だという証であることに気付いていない。犯人の鈍さに思わず苦笑してしまう。

「やはり、そうきますか。では最初から手順を踏んで説明しましょう。藤木からの電話を不自然に思い、私は藤木の家に向きました。ここで考えなければいけないことは、藤木の方から通信を切った、ということですよ。私が着いたときには藤木は殺害されていた、では誰が通信を切ったのでしょうか。藤木でしょうか？仮に藤木が電話を持っていたのなら何か声を発したはずですよ。声が発せられないほどに衰弱していたとしても呻き声などでも構わない。要は絶体絶命のピンチだと伝えることができれば何でもいいわけです。しかし無言だった。従って私と通信していた時には藤木以外の人物が周りにいて、その人物が通信を切ったということになります。その人物とは言うまでもなくこの事件の犯人、つまりあなた、ということになります」

「それなら、電話を掛けたのも俺だって言うのか？その藤木って奴がそのときに携帯を持ってなかった、というのなら当然犯人が掛け

たことになるだろ。わざわざ犯行を知らせるような馬鹿はいねえだろうが」

少し落ち着いてきたのか、巻き舌で威嚇しながらすごんでくる。

「掛けたのは藤木でしょう。あなたがそれに気付いて取り上げた。私は通信が途切れる瞬間に何か擦れる音を聞いています。それはあなたが藤木から電話を取り上げるときに、受話器に触れた音だったんだ。あなたは相当焦ったでしょうね、電話からは男の声が聞こえているわけですから。早く立ち去らないと、その男が来るかもしれない、しかし証拠を残しておくわけにはいかない。考えた拳句、盗んだ金と携帯電話、扼殺した凶器を持って立ち去った、ということですからかね」

「金？俺が金を盗ったとでもいうのか」

「はい。今回の事件は物盗りによる犯行です。私は犯行当日藤木と遊んでいて、財布の中身を大雑把ではあるが知っていた。これは刑事さんにも言っていることです。が札入れには札が2枚以上入っていたことは確認しています。その後藤木は買い物に行っていますが、使用した金額は1000円弱。その時、1000円札を1枚使用したとしても、最低でも札が1枚無いと辻褃が合わない。しかし私が藤木宅に入ったとき確認したら札入れの中は空っぽだった。私と藤木が別れて行動していた時間をふまえても、犯人が盗ったとしか考えられないんですよ」

俺の返答に男は笑い声を上げて反論する。

「お前が盗ったんじゃないやねえの？警察もお前を疑ってるぜ」

「やはり、私が藤木の家に入ったときの嘘の状況を警察に吹き込んだのはあなただったんですね。携帯電話での応対は不自然極まりないものでしたから、もしかすると来るかもしれないと思い、息を殺して観察していたことでしょう。不覚にも私が網にかかりましたが、そのことについてはもう潔白が証明されている。あなた、墓穴を掘りましたね。わたしがその状況を論理的に説明し、犯人じゃないと証明出来たとき、『なぜあなたが嘘をついたのか』ということが議

題に上がる危険性を考えなかつたのですか？」

男は唇を噛んだ。その表情は怒気を含んでいた。

「そんな勘違いだった、と言えば済む話さ。俺が犯人だという決定的な証拠にはならない」

「そうですね。そこでダイイングメッセージの登場だ」

「ダイイングメッセージ？」

男は怪訝そうな顔をする。

「そう。藤木は死ぬ間際、というには早すぎるか、正確には携帯電話を使用する前に犯人の名前を書き記しているんです」

これには男も慌てた素振りをみせる。

「そこには『301』という数字が消された状態で残っていました。ああ、これでは何を言っているのか、あなたには判らないですね。

要するにパソコンに文字を打った後、一旦『バックスペース』キーで消しておくんです。そうしてもソフト自体を閉じない限り、『元に戻す』アイコンをクリックすれば、再び文字が浮かび上がってくるということですよ。あなたの表情を見る限りではそのことすら気付いていないようだ。無理ありません、ノートパソコンは閉じられていましたから。もちろん打ち終わった後藤木自身が閉じたのです、渾身のトリックが闇に葬り去られないように。まあ藤木も色々複雑な線も張っている。先ほどのノートパソコンが閉じられていることもそうですけど、万が一パソコンを開かれたとしてこのトリックが見破られたとしても『301』では何が犯人を示しているのか判らない。むしろ301号を連想させて、犯人にとつて返つて都合が良いとさえ思ったかもしれない。しかし、それが藤木の狙いだっただけですが」

「それが決定的な証拠か？笑わすなよ。頭おかしいんじゃないか、お前」

罵倒するように吐き捨てる。

「まあまあ。この暗号を解けば、あなたの顔色も変わると思いますよ。まず、『301』はこのままでは解けない、漢字に変換する必

要があるのです。それなら何故はじめから漢字にしなかったか？藤木の置かれた立場を考えて見ましょう。殴られて瀕死の状態、自分の命がもう長くないことは本人もわかっていたことでしょう。その時パソコンのトリックが頭の中を過ぎった、幸いにもパソコンは傍にあり、犯人も気付いていないようだ。しかし、自身の命数もそうですし、いつ犯人に気付かれるかもしれない状況、できるだけ速やかに行う必要があった。漢字で打つと『さん』『ぜろ』『いち』と六文字打たなければいけない。しかも変換キーで一発で漢数字に変換されるとは限らない。『さん』なら『参』や『産』が先に出てしまふ可能性がある。他の漢数字も同じ危険性ははらんでおり、それをいちいち修正する気力も時間も到底ない。その点、アラビア数字なら普通に数字キーを打つだけでいい。たった3回、その後戻す作業を行ったとしても、漢字で打つときほどの労力は使われない。これが漢字ではなく数字で打つた、逆に言えば、数字で書かれてある文字を漢字に変換した理由です」

男の表情は変わらない。というか、何を言っているのか意味がわからないといった表情だ。

「『三一』になった文字をどうするか。言い忘れましたが『零』は『〇』が正解です、住所を書くとき等でもこちらが一般的ですから。これだけではまだ何がなんだか判りませんよね、さらに進化が必要です。次にこの『三一』を部品として考え、組み合わせさせていただきます。まず『三』を書いておいて、『一』を三の中央に重ねます。すると、『亘』になります。残った『一』はそのままで並べたら、『亘一』になります。そうですね、507号の渡辺亘一さん」

渡辺と呼ばれた男は一瞬ひるんだ様子だが、直ぐに険しい表情に変わる。

「ふん、それが証拠か。大体その数字自体が間違っているかもしれない、『310』とかだったら310号の奴が犯人なのか。それとも単純に301号の奴が犯人なのかもしれない」

「あなたはそう反論するしかないでしょうね。それでは、その可能

性を否定する証明をしましょう。まず、藤木が打つ数字を間違っただという可能性。キーボードがあれば一目瞭然なのですが、ここにあるはずはないので口で説明することにします。打つ箇所はキーボードが変わっても統一されていますのでどれでも同じです。例えば、3なら右下、5なら真ん中、7なら左上といった風に。これを頭に入れて『301』を打っていきましょう。『3』は右下『0』は左下、『1』も左下ですが『0』の上に位置しています。これを順番に打っていくと指の動きは右下、左下、上です。キーボードは全て同じなのでから、当然指の動きも同じであることは判りますよね。じゃあ、仮に藤木が間違っただとするとするなら、『614』や『947』などになっていないとおかしい。何が言いたいのかということ。指の動きから『310』などになることは絶対にならない、ということです。次に、そのままダイレクトに301号の住人が犯人の場合。ここで渡辺さんに質問させて頂きますが、301号の住人は誰でしたっけ？」

渡辺は無言のまま睨み続けている。しばらく待ったが、それが途切れることは無かった。答える気が無かったのか、答えることが出来なかったのか。判りきつたことだ。

「山藤さんという方らしいですよ。この方の苗字『やまふじ』と読むのでしょうか、『さんとう』と読むのでしょうか？判らないですよ、正直私にも判りません。次に510号の方の名前を知っていますか、判らない？510号は山田さんです。もう何が言いたいのか、おわかりじゃないですか。ワンルूमマンションにおいては何処に誰が住んでいるかなんて気にする人はいない、ということ。例えばネームプレートに姓名が掲げられていたとしても、玄関前まで行かないと判らない。郵便受けにはほとんどの人が名前を掲げていないわけですから、エレベーターを利用して藤木には判りようが無い。知っていたとしても、隣りの人ぐらいじゃないですか。藤木もそうだったでしょう、私は藤木と親しくしていましたがマンションの住人の話題が上がったことは一切無かったですから。それを

ふまえて考えたら507号の渡辺さんから509号の佐藤さんしか該当しなくなる。さらに前述の説明から『310』すなわち『さとう』になる可能性は皆無で、私の解説では渡辺さんの名である『巨一』になる。つまり、どの状況をとってもあなたが犯人だと示しているんですよ」

渡辺は睨みをきかせたままだが、動揺は見取れる。あんたはもう終わりだよ。

風がさらに強さを増してきた。木々のざわめきは、決して終わることのない唄を奏でているかのようだ。

エピソード

「それでもまだ決定的とは言えない。状況証拠のみで俺が犯人だという物的証拠は一つも無い」

寒いのか、力が入っているのか、拳を握り締め小刻みに震えながら猶も抵抗する。

「そうですね、あなたの言うとおりです。しかし、あなたは物的証拠を持っていないはずだ、藤木の携帯電話と凶器をね。これもあなたにとっては誤算だった。犯行後私がすぐに来てしまい警察へ通報したため、あなたは出るに出入れず処分する機会を逸してしまっただからです。証拠を隠滅する機会があったでしょうが、常時警官がウロチヨロしているこの場所で。ああ、そうだ。言っときますけど、仮に上手く持ち出せたとしても安心するのは早いですよ。私には犯行当日から刑事の尾行がついていました。被害者隣りに住んでいるあなた達にも当然マークはついていてでしょう。つまり、あなたが不審な行動をするのに合わせて警察の方も何らかの反応を示す、ということですよ。しかし、今のところ警察によるあなたへの締め付けは強くなつてはいないようだ。そこから犯人は未だ物品を所持している、という推論は導き出せるわけです」

後半は半分鎌をかけている。しかし、状況から渡辺が携帯電話と凶器を隠し持っていることは明白だ、と確信している。その証拠に、渡辺の顔面は蒼白で目も虚ろになっていた。

「もう反論はありませんか。では、私はこれからこの事を話しに警察へ向かいます。あなたには、私より早くに交番に行き自首することを勧めしますよ」

薄っすらと笑みを浮かべながら、呆然としている渡辺を一瞥した後踵を返し、もと来た道へと歩き出した。その瞬間。

背後からドン、と押されて倒された。うつ伏せで砂利の中へ転がると、渡辺が馬乗りに乗るの背中に乗ってくると、首に何か紐状のも

のを巻きつけてきた。

「馬鹿か、お前は。ノコノコと殺されに来やがって。ああ、そうだよ、俺が殺したんだ。こんな風にしてな！俺はビッグになるんだ、こんなところで捕まってたまるか！」

首に巻きついた紐は、さらに締め付けが強くなり肉に食い込んでくる。もがけばもがくほど相手の力は強くなり、それに反比例するかのように俺の力は失われつつあった。息が出来なくなり、顔が赤くなっているのが自分でも判る。次第に何も考えられないようになってきた。俺はこのまま殺されてしまうのか。

「おい、警察だ！その薄汚れた手を放してもらおうか！」

懐中電灯の光が目を眩ませた。それと同時に首にかかっていた圧力は急に力を失い、その反動で砂利の中に顔を埋めてしまった。渡辺は何が起こったのか判らず、両腕を挙げ呆然としているようだ。

自力で馬乗りになっっている渡辺から脱して、首に巻きついている紐を外した。首に残った跡をさすりながら大きく深呼吸した後、渡辺の姿を眺めた。未だに埴輪のように口を開け硬直している姿が滑稽で愉快だ。

「少しタイミングが遅いです、北畠刑事。ボンヤリと三途の川と死んだおばあちゃんの姿が見えましたよ」

渡辺の手に手錠を掛けた後、北畠に話しかける。その表情はいつもの柔らかい表情ではなかった。

「あなたが当初の計画と違う動きをしたから、こちらの対応も遅れてしまったんですよ。それにしても殺人犯相手に自ら背を向けるなんて、無茶なことをする。今回は紐での犯行だったから良かったものの、これがナイフ等の刺殺、撲殺ならあなたはどうか対処していたんですか？」

単純な疑問ではなく、諭すような口調。北畠自身も草むらでハラハラしながら飛び出すタイミングを凶っていたことだろう。その言葉には、自身の責務というより俺の事を心配してくれているという暖かさを宿していた。その眼を見たら、『その時は死んでも良いと

思っていました』とは言えなくなってしまうた。

そう、これは全て犯人を誘い出すための罠。まず犯人宅に『お前が犯人だと知っている』等の手紙を放り込み（内容には犯人につきながら得る状況証拠を仄めかし、犯人に心理的動揺を与える）、場所と時間を指定し、その場所に向かわせる。その時間前に北畠刑事に張り込ませ待機させる。そこへ俺が後から行き、犯人と対峙し犯人を追い詰める。進退窮まった犯人がどうするかは犯人次第だが、仮に犯行を認め素直に従ったら、俺が警察へ連絡を入れて終わりだった。まあ、すでに殺人を犯している相手だ。俺も殺して口を塞ごう、と考えていることは目に見えていたけど。むしろ、それがこの計画の狙いだった。つまり、今のままでは状況証拠だけで渡辺の部屋を家宅捜索できるかどうかは判らないが、これで俺への『殺人未遂』という大義名分ができ、堂々と家捜しできるわけだ。これでこの事件は終わった。

「それにしても本当に良かった。犯人が捕まって、被害者であるあなたの友人も喜んでいることでしょう。私はこれから犯人を連行するために署に戻ります。また後日お礼を言いに連絡いたします」

北畠はピシッと敬礼すると、ノロノロ歩く渡辺を急ぎ立てて境内を後にした。

「藤木が喜んでいるか」

そんなはずはない。これからが本当の意味で人生の始まりだ。学んだことを活かし、出会えた友人や家族と共に山あり谷ありの苦しくも楽しい人生を送るはずだった。それを一瞬にして奪われた本人の無念は計り知れない。

残された遺族にも同じことが言えるかもしれない。大切な家族が奪われた心の穴は一体どのようなにして埋めればいいのか。そしてそれは、そのまま俺にも当て嵌まる。

事件は解決した。しかし、俺には何が残っただろう。

顔を上げ、天を仰いだ。藤木、たった今判ったことがあるんだ。人は本当に悲しいときには泣って出てこないんだな。

風が時より突風のように吹きつける。しかしそれに抗うように、いつまでも微動だにせず立ち尽くしていた。

カラン、とドアに取り付けている鈴が鳴った。その後すぐにマスターが「いらっしやいませ」と丁寧に話しかけ、席へと促す。客は「寒い、寒い」と言いながら歩き出し、俺のテーブルの前で立ち止まって「よお」と声を掛け、向かいに座る。新田だった。

「待たせたか？どうも今回の事件が小難しくてな。って、お前コヒーカップの中身無いじゃないか」

マスター、と新田が大声で店の主を呼んだ。

「アメリカン一つと、お前はいつものエスプレッソでいいよな？」
かしこまりました、とお辞儀をして立ち去ろうと背中を向けた瞬間、マスターを呼び止めた。

「マスター。私には、ミルクティーを持ってきて下さい」
「ええっ!？」

これには新田だけでなく、マスターも驚きの声を上げた。コーヒーを湯水の如く消費する男からの衝撃的な発言に言葉を失って固まっている。

硬直している二人を放っておいて、窓の外へ顔を向けた。空はまるでダージリンティーのように深い色に染まっていた。その色に薄く馴染んでいる雲の一つを見つめ、その形状と藤木の笑顔を重ね合わせて微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7599r/>

あの時も君はミルクティーを飲んでいた

2011年4月6日13時10分発行